

「糠平大会」に参加して

坂井達朗

(一)

北海道に渡つたことのないものにとつて、帯広からさらに一時間余り入つた会場での大会と云うのは、それだけ充分心おどりするものがあつた。雄大な平原と紅葉の中のひなびた温泉を想像し、「農村自治—その制度と主体—」という魅力的なテーマにさそわれて、早速参加させていただくことにした。

ところが困つたことに、例年の教室行事の時期が遅れてきており、今年は大会期日の直後に当つてしまつた。列車の都合があつて、二日目の討論は最後の一時間程は聞くことができない。特に三日日の見学会にはぜひ参加したかったのであるがあきらめざるをえなかつたのはいかにも残念であつた。

大きな期待をもつてのぞんだ北海道の自然は、狩勝峠からながめる十勝原野といい、糠平温泉の紅葉といい、想像以上にすばらしいものであった。さらに研究会は例年にまさる盛り上りで私を圧倒した。いつも、当番校、報告者の諸会員の御努力と御配慮によるものと感謝の気持で一杯である。

会場で、大会印象記のようなものを求められた時、見学会はもとより、討論も途中で失礼しなければならぬ事情をお話して辞退させていただこうとした。しかしあれを許されず、結局討論の後半に開いては村長利根朗会員にお願いして詳細なメモにしていただき、見当をつけたことにした。今、原稿用紙を前にふりかえると研究会の印象はあまり複雑でかつ深長である。それを簡単に述べつくすことは到底不可能であると悟つた。そこで課題報告とそれにつづく討論を中心として、会場での論点を私なりにできるだけ整理して示すことによってこの責をふさぐことにした。以下は前半は坂井のメモ、後半は村長会員のメモによる復元である。しかし文章の責任はすべて坂井が負つている。

大会第一日、午前中は自由報告にあてられた。プログラム通り本間勝喜、不破和彦・内田司・松岡昌利の四会員により各三十分钟のレポートと質疑が持たれた。いづれも現地調査を背景とした力のこもつた報告であつただけに三十分の持ち時間では少々不足気味であり、報告者も意をつくせない点があつたのではないか。数をしぼつても、一報告の持ち時間を延長するのも一つの方法ではないだろうかと思つた。

課題報告は第一日午後と第二日午前に、菅野正、木村武司、大沼盛男、余田博通の四会員によつてなされた。

菅野報告は庄内地方の小作農を中心としたムラを素材としながら、昭和恐慌期から戦時体制までの間の村落自治の動向を、産業組合運動の展開を通じて検討したものである。この期の自治の問題は、上からの施策としての自作農創設・負債整理事業・医救土木工事等を

どううけとめるかの問題につきるとし、産業組合が村当局と一緒にとなつてこれにあたつた過程が分析された。

木村報告は地方財政制度の歴史的展開を、日本とイギリスとの対比で論じた。両国とも今日では地方自治は中央政府の下請けと化している。日本の場合その分担活動は国家行政の全般にわたつており、イギリスのように特定部門への集中・限定のないのが特徴であると指摘され、それにともなう財政構造の相違が明らかにされた。

大沼報告は北海道農業の典型、十勝上士幌で、農政の各画期に農村再編成の政策がどのような視角からうけとめられたかを明らかにした。農民一農協から国政へのフィードバックをどう保障するか、集落内での意志決定の場の民主化をどう達成するか、農地管理の主体としてふさわしいものは農協一自治体か、集落か、等が検討された。

余田報告は宝塚市西谷波豆を対象に、明治地方自治制度成立期の

「自然村」と「行政村」との関係を追求する。当時の兵庫県知事神田孝平の獨特の理念もあって、「自然村」がこの期を通じて機能しつづけた様相が明らかにされた。

(三)

第一の柱に関する討論から進められた。

岩本会員は余田報告に対して、明治期における「自然村」の機能の存続に関して、残っているムラはすでに内容が変化しているのではないか。例えばそこにみられる村法の制定は、成文化しなければならない程にムラの「ゆるみ」が生じていたことを示すものではないか等々が問われた。これに対し報告者から、株講の連合体として延宝期に基本的に定まつたムラの枠が少くとも今日までは依然として残ってきた旨答えられた。

から各自の考える「自治」を明らかにする必要があると発言され、

各報告者から補足説明と質疑がなされた。

その中で印象的であったのは、柿崎会員の質問と菅野・大沼両報告者の発言の中で、上からの国政に農民が下から対応し、その対応が逆に国政に反映する。国政は都合のよい場合のみその反映をとりあげるという絡縁が指摘され、結局下からの動きをどう評価するかが問題であると結論されたことである。

昼食をはさんで午後の部に入り、冒頭に司会者は論点を二つに整理した。

〔国家から家までの各レヴェルでの「自治」との関わり合いを明らかにし、その中で「自治」の中味を考えること。

〕戦時体制下、國家権力がムラに対する把握を強化し包摶して行くなかで、ムラはどの様に対応したか。それが戦後の農村自治にどう反映しているか。国家の包摶をのりこえうる可能性の所在をさぐること。

また菅野会員からは、庄内地方で部落ぐるみの小作争議が行なわ

れていた当時、行政村は部落連合にすぎなかつたと説かれた。

ついで島崎会員からは、余田報告に云う「家連合としてのムラ」と北海道におけるような「散在的家族農場による集落」とは、基本的に異なるのではないかと云う発言があり、布施・大沼両会員から北海道における集落とムラの関係について、興味深い説明があつた。

北海道（道南にみられる小作制大農場の場合はのぞく）では、開拓の当初、各戸五町歩の国有地払い下げを受けて、官置的集落形成がなされ、一〇～五〇戸で実行組合を形成した。組合は部落と重なり合い、その中で農民の日常的界が創られて行つた。（ムラが創られそうになる時代）しかし戦後、基本法農政・ことに昭和三九年の冷害を契機とした酪農の進展により、當農計画は部落単位ではなく町村単位で樹てられる様になり、農協・役場との直結の下で農家の選択的拡大が図られた。（ムラがこわされて行く時代）その結果、大量の離農者が発生し、場所によつてはわずか二・三戸の組合員が残つたのみといふ「過疎化現象」を生じており、実行組合が依然として土地移動などの際の意志決定機関である場合も多いが、今日では行政範囲の再編成が必要となつてゐる。実行組合よりは利用組合に集まりがちな若者が、どのような連帯を創つて行くかが今後の課題である。

(四)

第一の柱については論点を残しつつも、討論は第二の柱に移された。

大沼会員から十勝の農村について次のように発言された。近代化的農政を積極的にうけ入れ、高度の機械化体系を完成させたこの地方の農業は、一方で個別農業の選択的拡大のため在来のムラはこわれてしまつた。他方農業生産そのものについても、地力低下の問題が生じつつある。現在ここにおける農村自治再生の道として二つの可能性が考えられる。その一つは農協のリードによつて町村をこえた範囲で牧畜と穀倉農業との交換を行なつて地力を維持する方法（士幌型）。その二は近代化農政を否定し、個別の經營の内部に家畜を導入して地力維持を図る道（池田型）。

この問題について、島崎・細谷両会員から地力管理の農民的形態はどういうものか、それは「集団化的な道」であるのか、「個別化的な道」なのが問われた。大沼会員からは自作的土地位所有を基礎とした自作地の拡大に即した再編成が考えられるべきであると発言があり、地力問題も含めて、農村自治は階層性の問題をぬきにしては考えられないのではないかと提言された。

ここで司会者から、政策とそれをうけとめる農村との問題について、さらに広く内地の事例をも含めて発言が求められ、庄内（細谷会員）、結城、蒲原、富山、佐賀（多々良会員）等の事例に関する発言があつた。いづれの場合も「集団化的な道」と「個別化的な道」との関連において地域特性の把握が試みられた。

ついで菅野会員からは、農村自治の内容に關して会員の間に共通の理解がないことが指摘された。それについて島崎会員は、地方自治と云う場合、都市自治が第一に考えられるのであるが、農民の市

民化を前提としない日本社会において農村自治をとりあけることの意味が述べられた。また高山会員は自治を考える場合の方法的視角について、日本資本主義の発展の中で、直接生産者が小商品生産者化し資本がこれを把握する。大型機械の導入、あるいは中型一貫機械化体系の確立によって農民の性格も変化してきている。自治を考える場合、こうした農民の性格を経済学的社会学的に分析する必要があると発言された。

討論の時間はここで終りをつけ、司会者は残された問題として次の三点を指摘した。

〔地方自治と農村自治との関連を考える必要がある。前者の中で後者を考えるのか、それとも両者別個の次元の問題とするのか。〕

〔今回の論議ではムラや「自然村」のみがとりあげられ行政町村の意義と役割が問題にされなかつた。行政の末端としての部落と家連合としてのムラは併存するのか、それとも両者は段階的に異なるのかを明確にする必要がある。〕

〔「自治」の主体を考えなければならない。この問題はつきつめれば「生活」という問題に行きつくであろう。〕

(五)

熱のこもつた討論の場から途中で退席しなければならないのは、いかにも残念であったが、四時六分発の列車に乗らなければならず駅へ急いだ。前日の大雨とはうつてかわって台風一過の好晴であつた。暗成る秋の中を列車は十勝平原を帯広に向つて下りて行つた。

美しい紅葉の間に、会場で話をうかがつたばかりの北海道農業が迷い山すそまで広がつていた。それをながめながら充実した二日間の快い疲労を満足感をもつて味わつた。